

## 論文要旨

### On Phasehood of Functional Categories in the Left Periphery (左方周辺部における機能範疇のフェイズ性について)

戸塚 将

本研究では生成文法理論で提案されている二つのアプローチ、フェイズ理論(the Phase Theory)と分離 CP 仮説(the Split CP Hypothesis)の統合を試みる。前者は Chomsky (2000)以降で提案されている、統語演算の最適化に関するものである。この理論では統語演算における派生はフェイズという単位毎に計算され、小さなコストで演算が可能になるとされている。一方、Rizzi (1997, 2004)は機能範疇による豊かな統語構造を仮定することで様々な現象に説明を与えようとする分離 CP 仮説を提案した。フェイズ理論は生成文法理論の説明的な側面での発展に貢献し、分離 CP 仮説は記述的な側面の発展に大きく寄与している。しかしながら、これまでこの二つのアプローチを統合しようとする研究はあまり行われていない。本研究はこれら二つのアプローチを統合し、生成文法理論の理論的および記述的両側面の進展に貢献することを目的とする。

第1章では、前提となるフェイズ理論と分離 CP 仮説について概観し、この二つのアプローチをどのような形で統合するかを論じる。具体的には分離 CP 仮説におけるどの機能範疇がフェイズ主要部になるのかという問題を探求する。本研究における提案は、分離 CP 仮説の機能主要部 **Force** と **Top** がフェイズ主要部であり、他の **Foc** と **Fin** はフェイズ主要部ではない、というものである。第2章以降では、多様な言語現象の分析によってこの提案が経験的に妥当であることを示す。

第2章では、機能主要部 **Top** と **Foc** の非対称性に焦点を当てる。前者がフェイズ主要部であり、後者がそうではないことを示しながら、この提案が話題化と焦点化の三つの非対称性に統一的な説明を与えることを論じる。具体的な現象は、統語的な島の形成、主要部移動の可否、音韻上の境界の形成についてである。第一に、話題化は統語的な島を形成するが、焦点化は島を形成しない。第二に、埋め込み文において、焦点化は主要部移動を引き起こすが、話題化は引き起こさない。第三に、話題化は休止(pause)を形成し、音韻上の区切りを生み出すが、焦点化は休止を形成しない。これらの非対称性は、本章の提案により、フェイズ主要部である **Top** が転送(Transfer)を引き起こし、自らの補部を解釈・音韻のインターフェイスに送ることにより引き起こされる現象であることを示す。

第3章は、機能主要部 **Force** に焦点を当てる。本章では、この機能主要部はフェイズ主要部であると提案し、主節で統語構造上、最も高位にあるこの主要部が持つ特性により、様々な統語現象に説明を与えることを示す。フェイズ主要部は、自らの補部を解釈・音韻のインターフェイスへと転送する。このとき、主節では最も高位にある機能主要部の端は両インターフェイスに送られないことになる。この主節の機能主要部 **Force** が持つ特性が、英語の助動詞省略 (**Aux-drop**)、空所化(**gapping**)、主語省略(**Subject-drop**)、日本語の助詞残留削除 (**Particle-Stranding Ellipsis in Japanese**)、ドイツ語の話題化省略(**German Topic-drop**)といった音声的に具現化されない要素を持つ統語現象に統一的な説明を与えることを示す。具体的には、省略される要素は機能主要部 **Force** の端に移動し、転送操作を受けないことにより、省略されると論じる。

第4章は、定形節と非定形節との構造の違い、並びにそれぞれの機能主要部のフェイズ性について論じる。具体的には、前者はこれまで示してきたように機能主要部による豊かな統語構造を持つが、後者は前者に見られる機能主要部の一部が欠如していること示す。さらに、この構造の違いが両構造に共通して見られる、機能主要部 **Force** のフェイズ性の相違に反映されることを提案する。定形節の機能主要部 **Force** はフェイズ主要部となるが、非定形節はフェイズ主要部にはならない。構造上の違いとフェイズ性についての差異によって、**Richards (2010)**の必異性(**Distinctness**) による分析の不備が解決される。**Richards** の必異性は同一の転送領域内で同じラベルを持つ統語対象物は音韻部門で線形順序化される際に、区別されず非文法的になる統語と音韻のインターフェイスに課される条件である。この条件自体は広範な統語現象を説明できることが示されているが、本章ではこれに見られる問題点を指摘し、それらの問題が本章の提案により解決されることを示す。具体的には、同一のラベルを持つ順序対が存在するにもかかわらず文法的になる事例、多重話題化、そして、英語の定形節関係節と非定形関係節に見られる非対称性の問題を挙げ、これらは本提案が示す構造上の違いとフェイズ性の違いから説明できることを論じる。

## 論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	戸塚 将
論文審査担当者	(主査) 教授 金子 義明 教授 大河内 昌 准教授 島 越郎
論 文 名	ON PHASEHOOD OF FUNCTIONAL CATEGORIES IN THE LEFT PERIPHERY (左方周辺部における機能範疇のフェイズ性について)
<p>本研究は、最近の生成文法理論の枠組みで展開されているフェイズ理論(the Phase Theory)と分離 CP 仮説(the Split CP Hypothesis)の統合をめざしたものである。前者は Chomsky (2000)以降で提案され、統語演算の最適化が追求され、統語演算における派生はフェイズという単位毎に計算される。一方、Rizzi (1997, 2004)は機能範疇による豊かな統語構造を仮定する分離 CP 仮説を提唱し、多様な言語間に見られる一般化を統一的にとらえようとしている。本研究はこれら二つのアプローチを統合し、生成文法理論の理論的および記述的両側面の進展に貢献することを目的とする。以下、各章の概要である。</p> <p>第 1 章では、フェイズ理論と分離 CP 仮説について概観し、分離 CP 仮説におけるどの機能範疇がフェイズ主要部になるのかを考察し、機能主要部 Force (力) と Top (話題) がフェイズ主要部であり、他の Foc (焦点) と Fin (定形性) は非フェイズ主要部であるとする仮説が提示される。</p> <p>第 2 章では、機能主要部 Top と Foc の非対称性が論じられている。前者がフェイズ主要部であり、後者が非フェイズ主要部とする仮説により、話題化と焦点化の三つの非対称性、すなわち統語的な島の形成、主要部移動の可否、音韻上の境界の形成について統一的な説明が与えられることが示されている。</p> <p>第 3 章では、機能主要部 Force に焦点が当てられている。Force をフェイズ主要部とする仮説、および、主節で統語構造上最も高位にあるため Force の edge 要素はインターフェースに転送されないという特性により、英語の助動詞省略、空所化、主語省略、日本語の助詞残留削除、ドイツ語の話題化省略、等の音声的に具現化されない要素を含む統語現象に統一的説明が与えられることが示されている。</p> <p>第 4 章では、定形節と非定形節に関して、前者は豊かな機能範疇構造を持つが、後者は機能主要部の一部が欠如しており、定形節の機能主要部 Force はフェイズ主要部となるが、非定形節の Force は非フェイズ主要部であることが論じられる。この分析に基づいて、Richards (2010)の必異性(Distinctness) による分析の不備が解決され、同一の範疇標示を持つ順序対が存在するにもかかわらず文法的になる事例、多重話題化、そして、英語の定形節関係節と非定形関係節に見られる非対称性が説明できることが示されている。</p> <p>以上のように、本論文は、フェイズ理論と分離 CP 仮説の統合をめざして、左方周縁部の機能範疇のフェイズ性に関する独自の分析を提示し、それに基づいて、英語を含む多様な言語における数多くの言語現象に新たな説明が与えられることを示しており、英語をはじめとする個別言語の記述的・実証的研究および言語理論研究の進展に寄与している。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士 (文学) の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	